

# “ボックス”の大谷商店が閉店



大谷商店(更級小学校入り口交差点)は昨年10月31日、閉店しました。昭和35年(1960)の創業なので、ちょうど半世紀。地域のみさんの長年のご愛顧に謹んで御礼申し上げます。創業時の場所は、利用者の多くが目的地とする姨捨駅と善光寺(長野市、戸倉上山田温泉のちょうど分岐点で、川中島バスのバス停がありました。雨風がしのげる三角屋根の箱型の待合所だったそうです。その役割を出店に際し、店舗に併設したことから、店自体が「ボックス」と呼ばれ、親しみでもらいました。

左の写真が創業時の店舗で、右側の椅子が見えるスペースがそれです。待合所としてだけではなく、お菓子も扱う万屋だったので近所の子どもの遊び場、たまり場でもありました。戸倉上山田温泉の映画館で上映する映画のポスターを張るボード(板)には何枚も張り重ねられて分厚くなっていました。自家用車がまだ普及していない時代、更級小学校の先生たちも立ち寄り、お客さんたちはよく笑っていました。現在は道路が整備されて少し様子が変わりましたが、創業前は戸倉上山田温泉から姨捨に向かう道は現在の小松工務店の建物(旧更級郵便局)の前をまっすぐ斜めに上っていました。そのため鋭角になった角の所にバス停があつたそうです。昭和36年生まれの子には記憶がありませんが、我が家には既に見えませんが、我が家に残る下の写真にその部分が映っています。既に小屋は撤去されているようで、冠着山の姿を描いたとみられる看板が立っています。

## 営業半世紀、さらしな堂で再出発

タクシーでも「ボックスまで」と言え運んでももらえ、誇らしい気持ちになると同時に、呼び名が不思議で洒落(洒落)していて、田舎っぽくありません。小屋型のバス待合所はほかの地域にもたくさんありますが、ボックスという呼び名はあまりないようです。姨捨駅と関係があるのではと思っています。



姨捨駅と戸倉上山田温泉の間にバス路線が敷かれたのが昭和2年(1927)。姨捨は観月の名所として今以上に全国に知られ、多くの都会の人がやってきて温泉に泊まりました。姨捨駅舎が西洋風でハイカラであるのもそのためだと思います。旅人がちょうど山と平地の境にある小屋のバス停を「ボックス」と西洋風と呼び、それが当地に定着していったのではないのでしょうか。冠着山に古代、姨捨山の異名を与えたのが都と当地を往来する旅人だったのと似ています(詳しくは更級小ホームページ掲載の「更級への旅33・34号をご参照ください」)。

### バス停の店—ありがとう大谷商店—

作詞・作曲：中村洋一

- バス停の店の ずうっとむこうの  
田んぼの中を バスが走ってくる  
川の向こうまで 橋をわたって  
子供は15円 大人は30円  
\*きのうが思い出に なくなって行く  
今日が終わり あしたが はじまる\*
- バス停の店まで おつかいに  
塩と砂糖と サッカリン  
せんたくせつけん はみがきこ  
ついでにおやつのみそパンひと袋  
\*~\*繰り返し
- バス停の店の 灯が消える  
静かにそおと シャッターがおりた  
時は流れる 陽は沈む  
時は流れる また陽は昇る  
\*~\*繰り返し  
あしたが はじまる

閉店後の店舗は「さらしな堂」として使います。さらしな堂の入り口なので、ここに寄れば「さらしな堂・姨捨」のことはなんでも分かる場になるのが目標です。大谷商店同様、笑いが絶えない場になりたいと思います。(大谷善邦)